

[臨床] 松本歯学 17 : 337~340, 1991

key words : メラニン沈着 — 歯間乳頭 — 歯肉切除

## 歯間乳頭歯肉にあらわれたメラニン沈着症の1例

岩本雅章, 太田紀雄

松本歯科大学 歯周治療学講座 (主任 太田紀雄 教授)

安東基善

松本歯科大学 口腔病理学講座 (主任 枝重夫 教授)

丸山 清

松本歯科大学 歯科放射線学講座 (主任 丸山 清 教授)

### A Case of Melanin Pigmentation on the Gingiva of Interdental Papilla

MASAAKI IWAMOTO and NORIO OTA

*Department of Periodontology, Matsumoto Dental College*  
(Chief : Prof. N. Ota)

MOTOYOSHI ANTOH

*Department of Oral Pathology, Matsumoto Dental College*  
(Chief : Prof. S. Eda)

KIYOSHI MARUYAMA

*Department of Dental Radiology, Matsumoto Dental College*  
(Chief : Prof. K. Maruyama)

#### Summary

The melanin pigmentation in gingiva usually occurs at the areas from the marginal gingiva to the attached gingiva, close to the muco-gingival junction of the incisor region. However we experienced the pigmentation in the interdental papilla of a 51-year-old woman.

A gingival ectomy was carried out to the patient, and the specimen was observed histopathologically.

No recurrence was recognized 3 months after the operation.

### 緒 言

メラニン沈着症は、基底細胞層に散在している melanocyte 内で、tyrosin または DOPA (3,4-dihydroxyphenylalanine) から tyrosinase の働きによって合成された黄褐色の色素が、同細胞の樹状突起を経て細胞質内に沈着を生じる疾患で、正常皮膚及び病的着色部にみられ、口腔粘膜の沈着は白人で少なく、有色人種でしばしば観察される。一般的に、前歯部唇側歯肉の歯頸部から歯肉歯槽粘膜境近くの付着歯肉に境界不明瞭な瀾

慢性淡褐色～帯青褐色としてみられるものが多い。また20歳代後半に好発し、歯周炎及び歯列不正者に多いことが知られているが、歯間乳頭歯肉にメラニン沈着が認められることは稀とされている<sup>1-4)</sup>。今回、我々は 23 部歯間乳頭歯肉に孤立した色素斑を認め、歯肉切除により経過良好な症例を経験したのでその概要を報告する。

### 症 例

患者：51歳 女性

初診：1990年 2月10日



図1：術前の口腔内所見，23部歯間乳頭にメラニン色素沈着が認められる

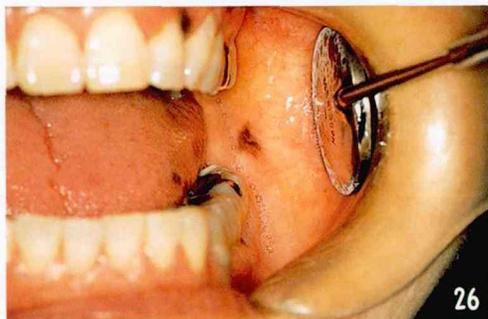


図2：左頬粘膜部に認められたメラニン沈着



図3：エリスロシン染色後の口腔内所見 PCR48%



図4：カーランドナイフにて切除中の色素斑



図5：色素斑除去後

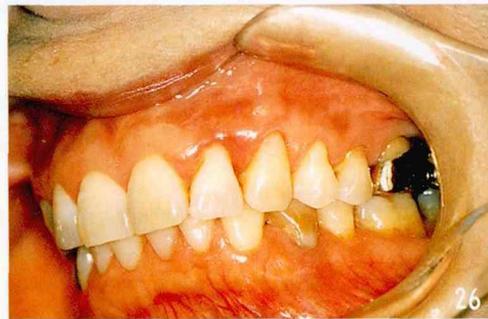


図6：術後3ヶ月後，メラニン沈着は認められない

主訴：23部の審美障害

既往歴：特記すべき事項なし

現症：全身所見；現在良好で特記すべき事項なし

口腔内所見：23部歯間歯肉に5 mm×3 mm大の黄褐色の色素斑を認め、左側頬粘膜にも5 mm×5 mm大のものが認められた。23部の歯肉の状態は、ナイフエッジ状を呈しており、7/7部全体的に軽度の辺縁性単純性歯肉炎を併発していた（歯肉炎指数：GI, 1度）

処置：1990年2月10日より6月21日まで7/4部の齶蝕処置を行ない、6月28日、2% xylocain E® 1 ccの局所麻酔下にて23部の歯間乳歯肉を5 mm×10 mm、深さ1 mmの範囲で色素沈着部をカーランドナイフにて完全に切除した。歯肉切除後歯周包帯を行ない、7月5日包帯除去、その後、ブラッシング指導（スクラッピング法）を併

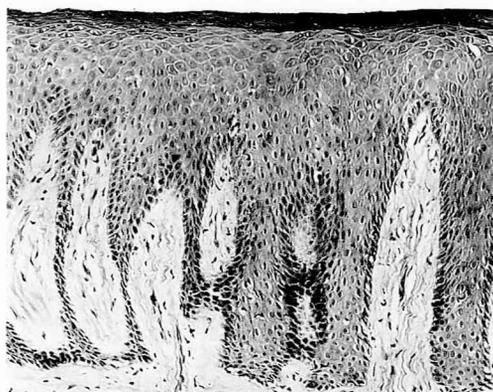


図7：基底細胞の細胞質に多数の褐色色素顆粒が観察される（H-E, ×110）

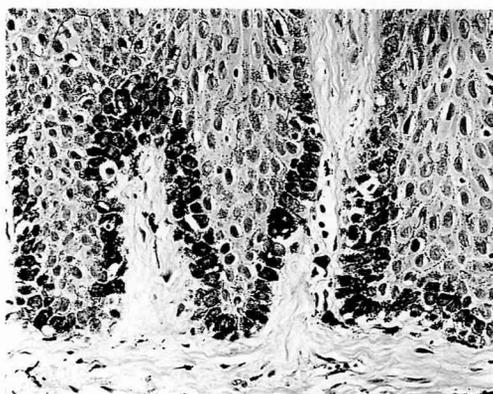


図8：Dublin application of the Boelcher methodに反応するメラニン顆粒（×220）

用して経過観察を行なった。また歯肉切除後切除片を10%ホルマリンにて固定し、通法に従ってパラフィン切片を作製し、H-E染色を施して、光顕的に観察した。

予後：3ヶ月後の23部歯間乳頭部の歯肉切除を行なった部位へのメラニン色素の再沈着は未だ認められず経過良好であり、その他（左頬粘膜部、左舌側部）の部位の色素斑の沈着部位は経過観察を行っていたが、症状の増悪を認めていない。その後は患者の希望により、処置を中止した。

病理組織所見：重層扁平上皮基底細胞の細胞質に褐色の顆粒が多数認められた（図7）。この顆粒はDublin application of the Bodian methodによってメラニンであることが確認され、それは所々で固有層内にも散在していた（図8）。以上の所見よりメラニン沈着症と診断された。

## 考 察

メラニン沈着は、通常日光の当たる露出部皮膚に多く、口腔内に比較的少ないとされる。また、好発部位は前歯部唇側歯肉の歯頸部からやや離れた、歯肉歯槽粘膜移行部近くまでの固有層歯肉とされ、右側に多く、歯周疾患のある症例や歯列不正の場合に沈着が著しいとされる<sup>1-4)</sup>。今回、我々の経験した1症例は、発生部位が歯間乳頭で非常に稀と思われる。成立については、古くから外因性、内因性の色素沈着に二別されているが、未だに解決されていない。本症例ではAddison病、甲状腺機能亢進症、薬剤による色素沈着、重金属の沈着、ヘモクロマトーシス、慢性腎不全、慢性肝障害、ポルフィリン症、Peutz-Jegher症候群などの全身疾患に伴うものではないと思われる<sup>5-9)</sup>。治療方法として今回、我々は歯肉切除を行ない、再発を認めていないが、メラニン沈着における歯肉切除症例において、Dummett and Balden<sup>10)</sup>は歯肉切除を行なった9例のうち6例に再発があったことを報告しており、またPerlmutter and Tal<sup>11)</sup>は歯肉切除を行なった2例の予後について、術後2年間とはともに再発がなく、7年後には1例において全くもとの状態に戻り、他の1例は全く再発が認められないことを記載している。今回の症例では経過観察が3カ月と短い為に、更に長期的な観察が必要と思われる。

## 結 語

今回、我々は上顎前歯部歯間乳頭に現われたメラニン沈着症の1例を経験した。沈着部位は歯肉切除術にて除去し、3カ月後の再発は認めていない。今後は症例の経過観察ならびに他の除去方法についても検討していく予定である。

## 謝 辞

稿を終わるに臨み、終始御指導を賜った本学口腔病理学講座 枝重夫教授に心からの感謝の意を表します。

## 文 献

- 1) 河合 幹 (1986) メラニン沈着. 口腔粘膜疾患の診断. (歯界展望別冊): 68-69.
- 2) 三代幸彦, 長谷川明 (1989) 審美歯科と基礎医学. *Dental Diamond*, 14: 296-301.
- 3) 藤林 平 (1938) 邦人における口腔粘膜色素沈着. *口病誌*, 12: 297-301.
- 4) Hirshfeld, I. and Hirshfeld, L. (1957) Oral pigmentation and a method removing it. *Oral Surg. Oral Med. & Oral Path.* 4: 1012-1016.
- 5) 宮崎 正編 (1988) 口腔外科学, 1版, 644-645. 医歯薬出版, 東京.
- 6) Bartholomen, L. G. and Dahlin, D. C. (1958) Intestinal polyposis and mucocutaneous pigmentation. *Minn. Med.* 41: 848-852.
- 7) Trodahl, J. N. and Sprague, W. G. (1970) Benign and malignant melanocytic lesions of the oral mucosa. *Cancer.* 25: 812-823.
- 8) Tuffanelli, D., Abrahm, R. K. and Dubosis, E. I. (1963) Pigmentation form antimaterial therapy. *Arch. Dermatol.* 88: 419-426.
- 9) Simpson, T. H. (1964) Mucocutaneous pigmentation: Peutz-Jeghers Syndrome? *Oral Surg.* 17: 331-334.
- 10) Dummett, C. O. and Balden, T. E. (1963) Post-Surgical Clinical repigmentation of gingiva. *Oral Surg. Oral Med. & Oral Path.* 16: 353-365.
- 11) Perlmutter, S. and Tal, H. (1986) Repigmentation of the gingiva following surgical injury. *J. Periodontol.* 57: 48-50.